

## 回る、双六と「車くるま」

～歌舞伎関係一枚摺から～

上方芸能史家 梅花女子大学名誉教授 萩 田 清

### 一、はじめに

「回る」というテーマをいただきました時、私は三つのことを頭に浮かべました。一つは、巡礼が聖地を「巡る」ということです。

私は香川県観音市の出身で、四国八十八か所巡りを思い出しました。四国八十八か所巡りは、阿波国に始まり土佐から伊予へと進み讃岐で終わります。私の故郷にあります観音寺は六十九番目の札所。祖母に手を引かれて毎月のように参拝した寺でした。年齢を重ねた今、故郷が恋しくなり江戸時代の八十八か所巡りの資料を集めようと試みたのですが、残念ながらまだいいものが入手できていません。新しいものですが、大正四年の「四国八十八ヶ所霊場 海陸里程早見」を見てください（図 1）。徳島の渡部商店というところが定価二銭でお遍路さんに売っていたもののようです。

大阪から四国へ参詣に行く場合、目的地は金毘羅宮が一般的でした。そのため金毘羅宮に向かう地図や資料は多く存在します。大阪から船路で丸亀へ、そこから金毘羅へ向かいます。そんな地図の中には四国八十八か所巡りの一部、七十一番から七十七番の札所が記されているものもあります（図 2）。

関西の人が身近に親しんでいましたのは、西国三十三か所巡りでしょう。私は職業柄お寺はよく立ち寄りますが、朱印帖を持ってなかったりして、まだ半分もご朱印をあつめていません。今年あたりから本気でご朱印を集めようと思っています。



図1「四国八十八ヶ所霊場 海陸里程早見」



図2 「丸亀ヨリ金毘羅善通寺彌谷寺道案内図」部分

## 二、大阪市中の寺社めぐり

四国八十八か所巡りや西国三十三所巡りだけに止まらず、江戸時代には大阪市内のいくつかの寺や神社を巡る風習がありました。大阪の年中行事を細かく記した「浪華の日名美」(弘化四年〔1847〕)を見ますと、当時の大阪の人々が毎月決まった日にお参りをする習慣のあったことが記されています(図 3)。例えば二十一日は大師巡り、十日は金毘羅巡り、七福神巡りは毎月朔日・十五日・二十八日、十八日は観音巡りのように、毎月決められた巡り処がありました。近松門左衛門の「曾根崎心中」は、お初が田舎客に連れられて、市中の三十三の観音を巡る「観音巡り」からはじまります。同じく近松門左衛門の「卯月の紅葉」には、毎月一日にお参りをする二十一社巡りが描かれています。大阪の人々の生活とお参りが密接に結びついていたことがわかります。

図3 「浪華の日名美」(部分) (弘化四年〔1847〕)

実は私は国立文楽劇場の文楽研修生の講師を長く務めています。文楽研修生は二年間の研修を経た後、文楽のプロとして活動しますが、研修生の出身地は東京・広島・九州など大阪から離れた地域の人が多いのです。文楽はそもそも大阪発祥のものであり、その世界を志す人は、大阪の師匠に直接弟子入りするのが一般的とされてきました。しかし、大阪から遠く離れた地域出身者にとっては伝手を求めることが困難です。そのため現在、国家事業の一つとして文楽研修生の育成をしています。文楽の作品は主に大阪の生活を描いています。ですから、研修生にとって大阪の年中行事は必須の知識です。そこで、この「浪華の日名美」をいっしょに読むようにしています。

ていねいに読みますと興味は尽きないのですが、民俗学や宗教学が専門ではありません



せんで、深入りは避けます。本日は私の専門であります上方歌舞伎の歴史に引き付けて「回る」話をさせていただきます。

### 三、『上方板歌舞伎関係一枚摺考』の「くるま」

はじめて大阪の清文堂出版から 1999 年に出した思い出深い著書です。江戸時代半ば過ぎから、大坂では簡便な一枚摺がたくさん出されました。歌舞伎関係の一枚摺は現在早稲田大学所蔵の『許多脚色帖』などの張り交ぜ帖がいくつか残っています。大阪の古書即売会にもよく出品されていました。狭い私宅に集めるには嵩の低い、場所のとらない一枚摺は好都合でしたから、可能な限り収集するように努めました。中間報告の形で成果をまとめたのが『上方板歌舞伎関係一枚摺考』でした。日本演劇学会の河竹賞をいただきましたが、きっと題材が珍しかったからだと思っています。

この本で扱った一枚摺にも、「回る」のテーマにぴったりのものがありました。「くるま」のついている一枚摺です。もちろん「走るためのくるま」ではありません。まず、図を見ていただきましょう(図4)。「戲場案内両面鑑」という歌舞伎に関する情報を多数集めた資料です。裏表、両面にびっしり歌舞伎通になるための情報が詰まっています。

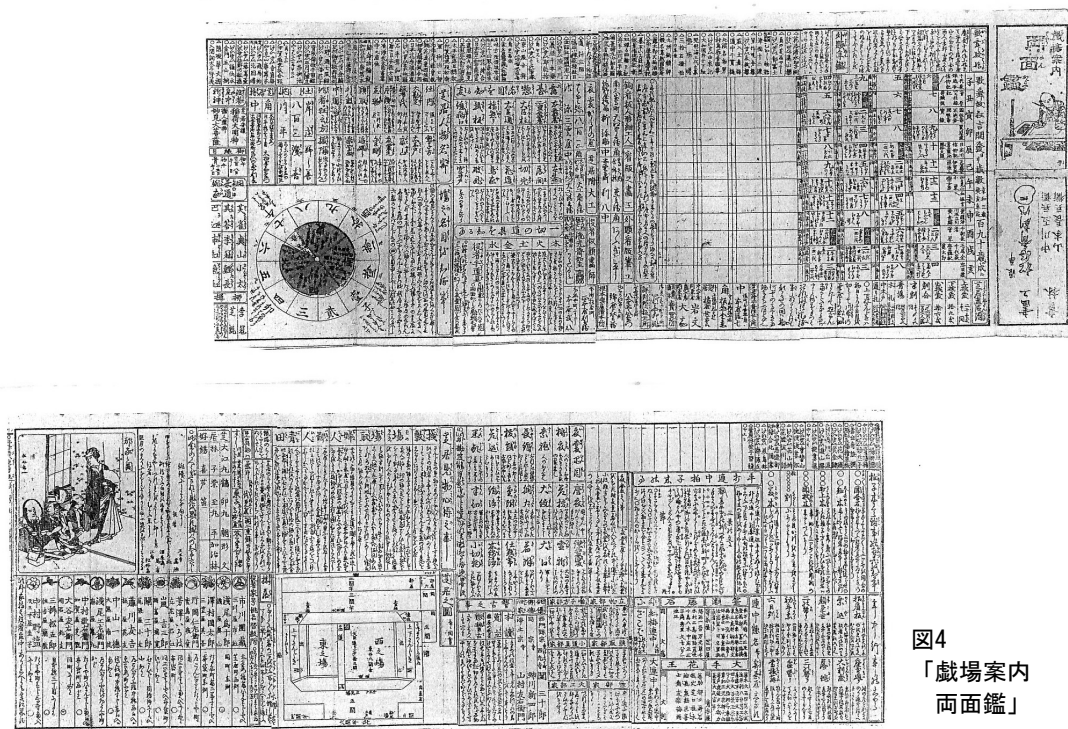


図4  
「戲場案内  
両面鑑」

本の形にすればそこそこの厚さの本になるはずですが、折りたたんで携帯できる形にしているのです。実用優先の大坂らしい発想と思います。簡略ながら年表もあります。上段

には歌舞伎の外題が列挙されています。もちろん著名な役者の情報も含んでいます。

少し横道に逸れますが、後の話のために、1800年前後の歌舞伎興行の話をしておきます。もともとは大坂でも前年十一月に顔見世興行を行い、年明けに二の替り興行が行われました。ところが、徐々に京都の芝居と大坂の芝居が合併してしまい、京都で顔見世を行ったあと、その一座が大坂に下って正月二の替りを興行する、そんなことになってしまいます。現代でも顔見世は京都で行うものとされているのはその名残です。顔見世とは、その名のとおり、役者の顔を見せるもの、年度の初めの興行の際に一座のメンバーを紹介する場でありました。野球に例えるとオープン戦のようなものです。人気役者の得意芸を総花的に見せる興行です。顔見世は現在十二月に行われています。本来は霜月朔日(十一月一日)初日(遅れることはよくありますが)でした。明治六年に新暦が採用されたため、月遅れの十二月に定着していったのです。寒い時期に朝早く起き、四条大橋の上の霜を踏みしめながら、待ち焦がれた顔見世を観に行くという季節感を、京都の人々は大事にされてきたのです。またこの両面一枚摺の資料には看板の絵描き、筆耕、芝居付き大工、畳団体の連名なども紹介されており、研究者にとって貴重な、ある意味マニアックな情報も含まれています。

さて、この資料の左下に見られる円形の図に注目してください(図5)。これが今問題としたい「くるま」です。よく見ると円形の中心部には穴が開いており、紙を捻って糸状にした紙縫を通して裏側で結んで固定

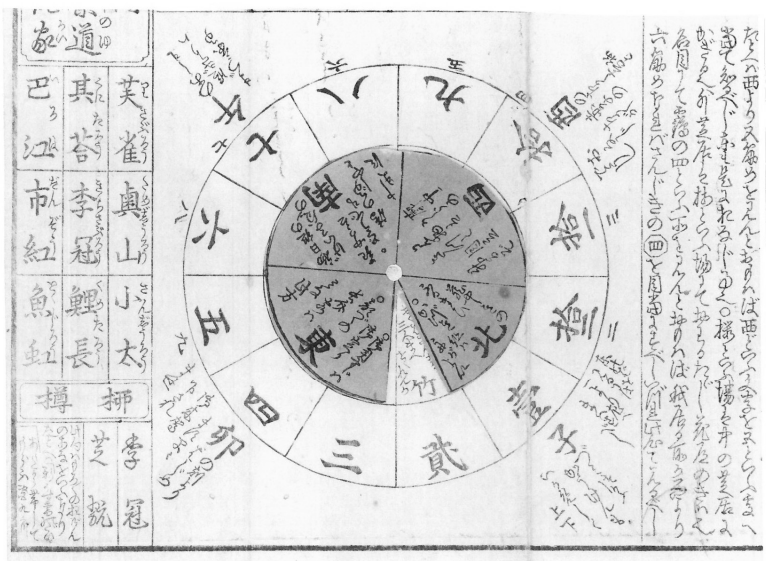


図5 「くるま」

されています。この紅色の円形の紙がくるくると回りますので、「くるま」と呼んでいるのです。回して使う時の説明が横に記されています。そこには、松○番、梅○番など客席の升の名称が示されています。現在の劇場の感覚とは異なります。中央の席が一等席とされていますが、当時は横の棧敷の方が高級席です。正面の席は「平場(ひらば)」と呼ばれた普通席(中等席)で、升到区切られていました。観客が自分の升の位置を確認し、その場の特徴を知るための仕掛けでした。正直にいいますと、常連には常識的なもので、実用的ではなかったと思われます。「仕掛け」として遊んで楽しんだのではないのでしょうか。今日の子供絵本には、立体的に絵が飛び出したり、折り曲げる



と別の絵になったり、いろいろな工夫がなされています。江戸時代にもそんな「仕掛け本」がありましたが、この「くるま」もそんな一つの遊びだと思われます。

私が最初に大阪の古本屋で入手したものには、この「くるま」は付いてませんでした。穴だけが開いていました。その後、大阪府立中之島図書館、大阪歴史博物館で見ましたものには付いておりましたから、後日「くるま」の残っているものを入手できた時はうれしかったです。

#### 四、パロディ物の歌舞伎資料

1800 年前後、歌舞伎の資料はたくさん刊行されます。それらの中には、当時実用的に流通していた書物をもじったもの、今で言う「パロディ」本が多く見られました。

○『戲子名所図会』(やくしやめいしよずえ)。寛政十二年〔1800〕刊。曲亭馬琴作。絵は三代目歌川豊国。この本は役者の世界・歌舞伎の世界を当時流行った名所図会(旅行案内書)をもじって作られたものです。

○『戲場訓蒙図彙』(しばいきんもうずい)。享和三年〔1803〕刊。式亭三馬作。中国の百科事典『訓蒙図彙』を歌舞伎の世界に置き換えて作られた本です。楽屋の様子や、大道具・小道具など、芝居内部のあらゆることが掲載されています。

○『戲場節用集』(しばいせつようしゅう)。享和元年〔1801〕。好文舎青氏作。上方版。「節用集」というのは、本来は漢字辞典ですが、江戸時代中後期になりますと、百科事典風に種々の知識を含みこんでいます。それを真似て芝居の用語などを集めて説明した書物です。

○『芝翫節用百戯通』(しかんせつようひゃっけつう)。暁鐘成作。文化十二年〔1815〕刊。三代目中村歌右衛門(俳名芝翫)のことが「何でもわかります」という辞書風百科事典です(図 6)。掲載部分は

「最負増益」の辞書の部分のはじめです。上部に本来は神話時代からの日本の歴史が書かれる所ですから、「国之常立尊」が描かれるはずですが、紛れもなく歌右衛門の姿です。この本は、『都会節用百家通』という家庭実用百科事典を、根気よく細かくもじったものでした。

その他は省略しますがまだまだあります。このような流

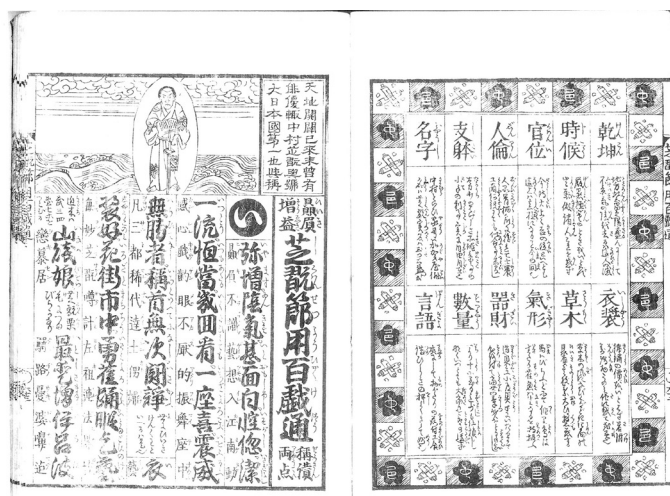


図6 『芝翫節用百戯通』暁鐘成作。文化十二年〔1815〕

れ、風潮を考えますと、私は「劇場案内両面鑑」の「くるま」も何かをもじったものではないかと推測しました。ある時、古書即売会でよく似たものを見つけたのです。それが「昼夜 萬歴両面鑑」です（図 7）。これは宝暦七年〔1757〕の刊行で「劇場案内両面鑑」より五十年近く前のものですが、実用的なもので

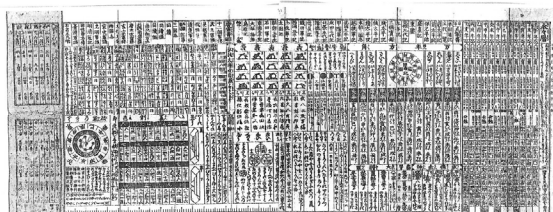
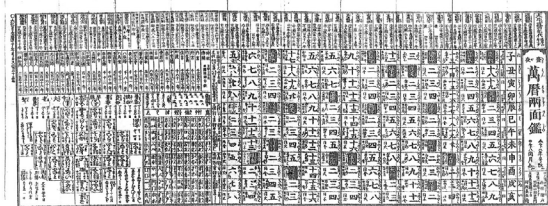
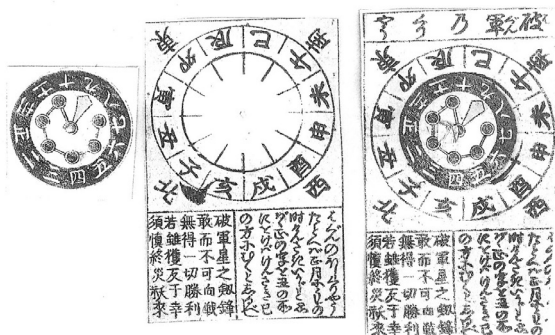


図7 「昼夜 萬歴両面鑑」両面刷り裏面宝暦七年〔1757〕

のですから、何度も版を改めて明治まで出版され続けていました（明治五年版もあり）。「昼夜 萬歴両面鑑」の内容は年代記もあり、歴代の武将一覧もあり、暦の見方や占いもあります。図版の左下に「破軍のくりやう」があります（図 8）。北斗七星の方角によって戦争の戦略（商売上の作戦）をきめる等、暦は人々の生活と密接な関係がありました。正月から十二月までを書いた「くるま」を回して占います。「劇場案内両面鑑」の「くるま」は萬歴両面鑑のパロディとして、歌舞伎の客席名称に置き換えて作ったものと考えられます。



「巻」のついた宝暦七年版  
はぐんのほしりやう  
たとへば正月にうし  
のときさきいかと思  
は正の字を丑の所  
にまけば けんさき  
の方にむくしるべし  
破軍星之劍鋒  
敢而不可向戦  
無得一切勝利  
若雖獲反于幸  
須換終災殃来

図8「破軍のくりやう」  
“くるま”を付けた形とはずした形

## 五、歌舞伎を材にした双六

「回る」で思い付きました三つ目は、絵双六でした。ご承知のように「双六」といいますと、王朝の姫君が優雅に遊んでいる盤双六もありますが、ここでは江戸時代の庶民の遊びの絵双六です。

歌舞伎関係の絵双六にふれる前に、簡単に絵双六の歴史にふれておきます。江戸時代の初め（1650 年頃か）の「仏法浄土双六」というのが現存しています。未学の僧侶



が、仏教の知識を得る為の双六であったと言われています。双六なので当然「ふりだし」と「あがり」があるのですが、「南閻浮洲」が振り出しとされ、中央上部に描かれた「仏」が上りです。修行をつんで仏になるという双六です。賽の目は一から六ではなく「南・無・分・身・諸・仏」と漢字で刻印されています。使用するサイコロの形は一般的な立方体のものでも、六角柱のようなものでも良いとされています。振り出しの「南閻浮洲」で「分」の目が出ましたら「畜生」へ落ち、さらに「むけん(無間地獄)」で「諸」を出しますと、二度と浮かべない「永沈(ようちん)」に落ちて、ゲームからはずされるルールのようなのです。

ここで紹介しています「仏法浄土双六」は双六コレクターとして著名な山本正勝さんの所持品です。山本さんは、私の浮世絵の先生でありました松平進先生に紹介していただいた方で、世界に誇る双六コレクターだと思われます。ご著書の『双六遊美』(芸艸堂、1988年)収載の仏法浄土双六をみますと、かなり手擦れがひどいことから、もとの所有者が実際に楽しまれた様子が窺えます。

絵双六を遊びの形式で分類しますと、廻り双六・飛び双六・飛び廻り双六の三種類に分類されます。仏法浄土双六は典型的な飛び双六でした。絵双六は種々雑多な内容で作られます。山本さんの『絵すごろく 生いたちと魅力』(芸艸堂、2004年)の分類では、道中双六、名所双六、役者・芝居双六、風俗双六、広告双六、合戦武者双六、文明開化双六、教育双六、のりもの双六、運動・体育・遊戯双六、漫画・滑稽双六・戦争双六となっています。別の分類も可能でしょうし、もっと細分化することもできるでしょう。

ここでは、私の専門分野に近づけて、上方の歌舞伎関係双六を紹介してみます。

○「部家姿錦の見物」。六花亭芳雪画。石和板。これは歌舞伎役者達の楽屋での姿が描かれているものです(図9)。右下に見られる振り出し部分の絵には、楽屋入りする際の駕籠に乗った役者の姿が描かれています。その次ぎの駒には女形が弟子(付き人?)と話している様子が描かれています。振り出しの部分の文句を読みますと「誰もかもすく 薪水な人 一寸そてをは 彦三郎」。誰もが好きになる、ほんとうに粹な人だから、ちょっと袖を引いてみよう、坂東彦三郎さん。これは短歌ではなく七・七・七・五の歌詞です。都々逸と同じ形式ですが、大阪では「よしこの」



図9 「部家姿錦の見物」六花亭芳雪画、石和板

と言いました。よしこの節の新作の歌詞を作る同人の集まり、結社がいくつかありました。その中の大川社の人たちの作った名吟を載せているということです。歌詞には役者名が巧みに読み込まれています。次の「水ももらさぬ 中村じやもの よそてうわきを 千之助」の唄には中村千之助の名が入っています。ここに登場する役者たちの動向から推測しますと明治四年（1871 年）に出版されたと思われます（明治四年八月没の荻野扇女がまだ入っている）。大川社名吟の横に記された六花亭芳雪とは大阪の歌川派の浮世絵師です（詳しい考証は『歌舞伎 研究と批評』25 号〔2000 年 5 月〕を参照してください）。

この双六の形式は廻り双六です。廻り双六は単に廻るだけではゲームとして面白くありませんので、普通は「一回休み」を入れたり、銭の印で罰金を払うところを作ったり、何齣か先に飛ぶ等の工夫をするのですが、この双六には細工が見られません。ということは、この「部家姿錦の見物」は遊び用の双六ではなく、よしこの歌詞をじっくり味わいながら役者の姿を思い浮かべて、絵を楽しむ双六といえましょう。

○次に紹介するのは「役者家形獨案内」。東京大学図書館霞亭文庫蔵『近世伎史』二編の五に収載されているものです。題名の上の角書に「嘉永五子年／正月大新版」とあり、嘉永五年〔1852〕正月の刊行。ちなみに言えば、この年はペリー来航の前年です。

振り出し（上方の双六では古くは「振りはじめ」といいました）は「浪花戎橋図」「是より案内はじめ」とあり、「戎ばし 北つめ 西」の中村大吉の家からはじまります。そこには暖簾がかかっており、矢車の紋が目印についています。役者は人気商売ですから、観客が自宅を見に来ることは喜ばしいことであつたのでしょう。

次の齣には沢村其答「戎ばし 北つめ 東」、その隣には市川米蔵「道とんほり たゝみや丁」とあり、市川米蔵の齣には“大当たり ほうび”とあります。その隣の齣の「ろうじばん（路地番）」はおそらく、路地番をしなければならないので“一回休み”の意味と思われます。これは単なる廻り双六ではなく、遊びとしての面白さも含んでいることがわかります。

ところで、上にあげた役者の名前は、今日の歌舞伎ファンの人でも耳慣れないかと思われます。そこで、この双六に登場している「幕末期の上方の役者」についてお話したいと思います。江戸の役者の名は今日につながっていることが多いのですが、残念ながら上方の役者の名は立ち消えているものも多いのです。

片岡愛之助は、八代目片岡仁左衛門の弟子で、三代目です。銀杏鶴の紋でした。中村歌右衛門は四代目の歌右衛門。歌右衛門は三代目までは大坂の役者でしたが、三代目が江戸へ下った際に弟子入りした人。主に江戸で活躍しますがこの時期は大坂にいました。片岡我童は、後に九代目仁左衛門を追贈された人。中村友三は“ともぞう”ではなく“ともさ”と読みます。友三は道外形（どうけがた、道化方に同じ）の役者として道頓堀で名を上げ、位をも上げた人物でした。私は『笑いの歌舞伎史』（朝日新聞



社、2004 年)の中で、この人は藤山寛美以前の「道頓堀の笑いの王者」だったと評しました。

尾上多見蔵は二代目多見蔵。非常に長生きした役者です。明治十九年〔1886〕に享年八十九で亡くなった人。「残菊物語」にも登場する人物で、三代目尾上菊五郎の弟子でした。菊五郎に心酔していたとされ、菊五郎が大阪に来ていた時に弟子入りを果たしました。その菊五郎は一旦引退して、その後地方の舞台で復帰した時、大川橋蔵を名乗ります。のちの映画スター大川橋蔵の名の由来です。尾上多見蔵は大坂ですでに大成している役者でしたが、師匠の大川橋蔵にならって自身も大川八蔵と名前を変えました。生涯、菊五郎に忠誠を誓った役者だったようです。

「役者家形獨案内」は役者の住所がわかることから、歌舞伎研究者にとって非常に貴重な双六であると言えます。住所をたどっていきますと、当時の役者が島之内、道頓堀辺に固まって住んでいる様子がはっきりと窥えます。個人情報取り扱いが厳しい昨今では到底考えられないことですが、こんな双六も出版されていたのです。

なお、ほぼ同じ性格の双六「役者家形一覧」が大阪城天守閣にあり、これは『大坂江戸時代図誌3』(筑摩書房、昭和51年)に図版が掲載されています。

さて、私が所有している、その他の歌舞伎双六を簡単にいくつか紹介します。  
○まず「新版役者附本極飛双六」(やくしゃづけほんきわまり とびすごろく)です(図10)。墨摺りの素朴な印象の一枚ですが、この種のものとしては古いもので、私としま

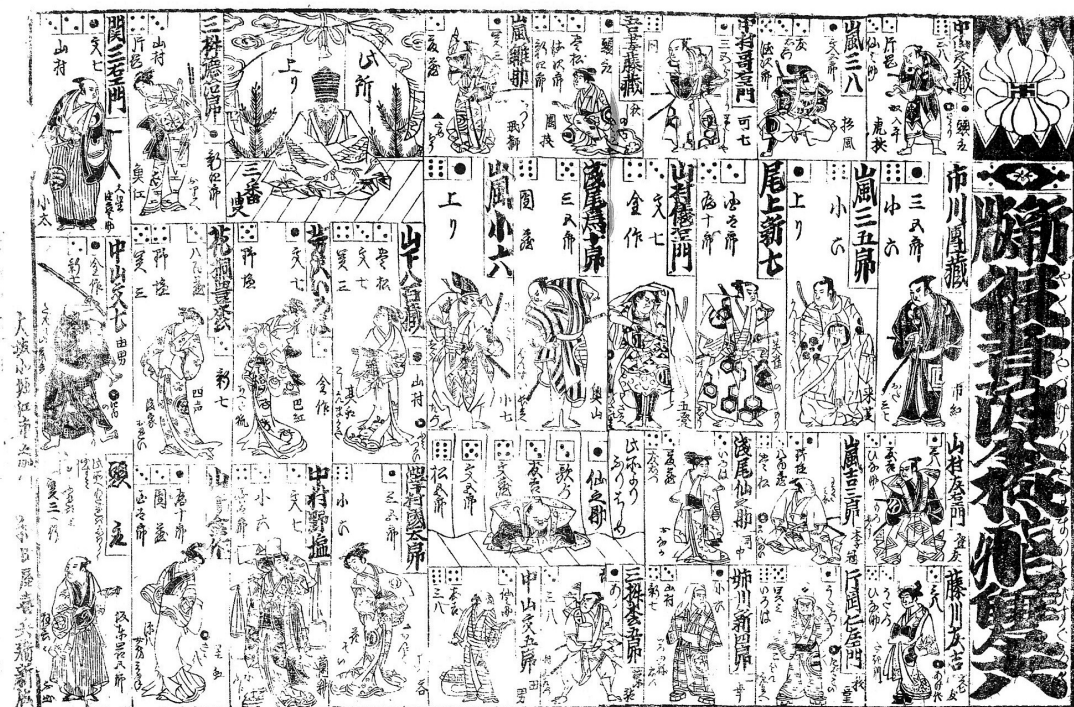


図10 「新版役者附本極飛双六」

しては自慢の一枚です。下から二段目四齣目「此所より ふりはしめ」として口上役が出ていて、賽の六つの目を記しており、それぞれ出目の齣に飛んでいきます。ですから、「飛双六」なのです。「役者附本極」というのは、歌舞伎の一年のはじまりであります顔見世の座組が決定して、顔見世番付が出されます、その番付をもじったものという意味です。右上に「座本」の紋ならぬ板元を示す「紋」が描かれています。よく見ますと、結綿の中に「木」の文字があり、これで「わた き」。板元の和田屋喜兵衛を指しています。上段やや左に「三番叟」が描かれ、「此所 上り」です。それぞれの齣の中には役者の俳名と得意の役名も記されています。年代考証の詳細は『上方板歌舞伎関係一枚摺考』の「上方歌舞伎双六の諸相」に譲りますが、結論だけ言いますと、寛政七年(1795)正月刊行のものかと思っています。

役者名を列举してみましょう。

藤川友吉・片岡仁左衛門・姉川新四郎・三枡松五郎・中山文五郎・澤村国太郎・中村野塩・山下金作・頭取坂東岩五郎・山村友右衛門・嵐吉三郎・浅尾仙之助・市川團蔵・嵐三五郎・尾上新七・山村儀右衛門・浅尾為十郎・嵐小六・山下八百蔵・芳沢いろは・花桐豊松・中山文七・中山文蔵・嵐三八・中村歌右衛門・吾妻藤蔵・嵐雛助・三枡徳治郎・関三右衛門

現在の歌舞伎につながる役者名もありますが、中山、山村、山下といった役者らしく聞こえない名前もあります。まだまだ江戸歌舞伎にひけをとらない時代の上方歌舞伎が思い浮かびます。寛政六年〔1794〕十一月に、片岡仁左衛門(七代目)と中村野塩が江戸に下ります。後に大活躍する三代目中村歌右衛門が「しうせやくしや(出世役者)」と言われて、大芝居に出て間もない頃のことでした。

○次いで「新板 役者宝船飛入寿古呂久」(図 11)。文化の初め頃〔1800 年少し過ぎ〕に作られたものと思われる。典型的な飛び双六で、あちらこちらに飛び回り、遊びとしても面白い双六でしょう。「ふりはじめ」は三番叟、浦島太郎、三社の舞・演奏、三浦翁助・東方朔・宝舟の中には七福神とお福、そして上りは猩々に朝日に鶴。めでたづくしのそれぞれを役者が演じています。



図11 「新板 役者宝船飛入寿古呂久」



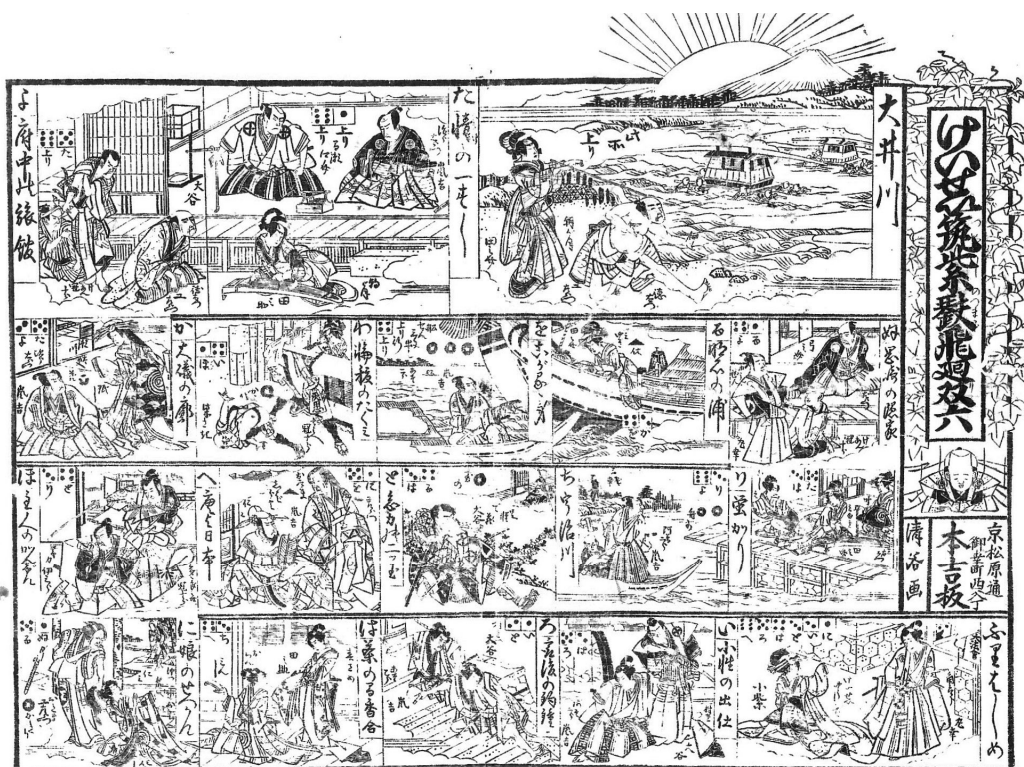


図12 「けいせい筑紫夫琴飛廻双六」(京都・本吉板、清谷画)

○次に紹介する「けいせい筑紫夫琴飛廻双六」(京都・本吉板、清谷画)は、現在「朝顔日記」の題で知られている作品(「つくしのつまごと」の「つまごと」は「琴」の異体字と「夫」の合字)の絵尽しといってもよいぐらいに、筋を追って描かれています(図12)。飛びながら順序よく前に進みますので、飛び回り双六といえます。この双六にも役名と役者が丁寧に記してくれていますので、年代推定は簡単です。文化十一年〔1814〕正月角の芝居で上演された芝居でした。この芝居はたいへんな大当たりで、三月まで持ち越し、そのあと四月から京都南側の芝居で上演されました。京都の板ですからその時に刊行されたものかもしれません。

○次は時代が下りますが、京都板の色摺のものを紹介します。「大新板当狂言尽寿語録」(京・吉野屋勘兵衛板・玉水画)は、合羽摺りといわれる技法で色づけされています(図13)。型紙を切り抜いて、上から刷毛で色を塗るものです。ただ、悪く言いますと墨の輪郭線と色がずれたり、型紙の補強のために白い線が残ってしまうという特色があります。しかし、現存しているものが少ないこともあって、素朴な味が評価されてもいます。内容は安政五年〔1858〕十一月の南側の芝居「仮名手本忠臣蔵」「花魁苔八総」(はなのあに つぼみのやつふさ、八犬伝の話)、「桂川連理柵」、北側の芝居「勝鬨草源氏」(かちどきみばえげんじ)「持丸長者金笄釵」(もちまるちょうじゃ こがねのかんざし)「景色会稽山」(けいしよくゆきみるやま)「有卦入萬倍曾我」「義経千本桜 道行」。外題が多いこともあって、代表的な場面のみが描かれています。

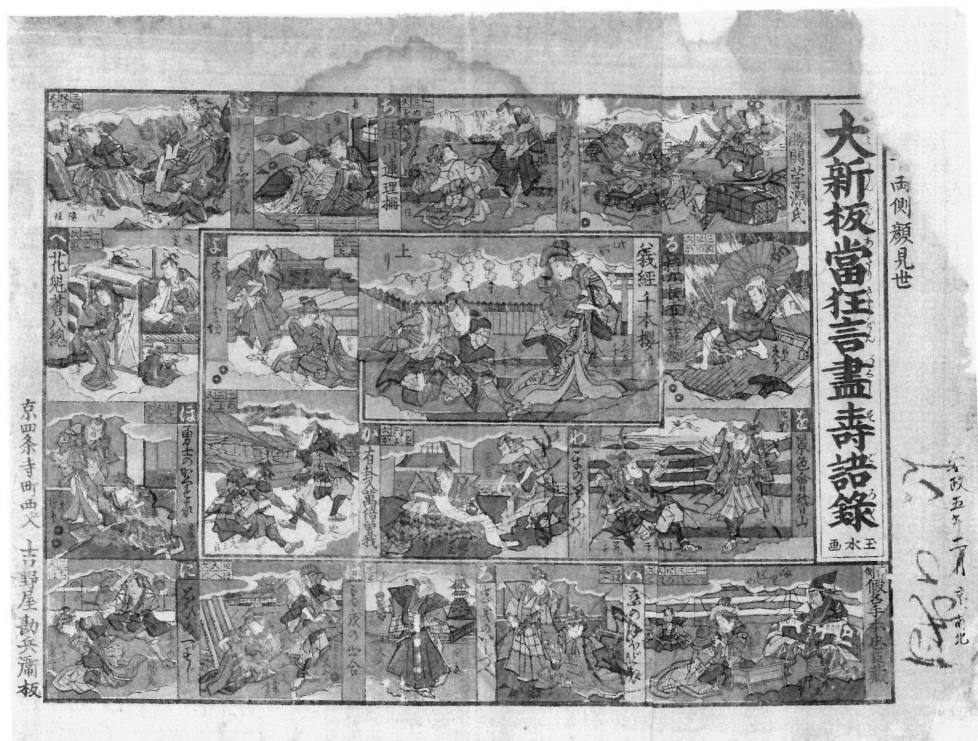


図13 「大新板当狂言尽寿語録」(京・吉野屋勘兵衛板・玉水画)

○付録として、近代の歌舞伎双六「衣裳競似顔双六」(図 14)。これは明治四十四年〔1911〕、大丸百貨店がお歳暮の際に得意客の為に作った双六です。中央に大きく初代の中村鴈治郎が描かれています。配り物としては豪華な摺りで、もらった人はていねいに保存したの  
 でしょう、何枚か  
 現存しているよ  
 うです。

双六はもっと  
 多数紹介したか  
 ったのですが、時  
 間の配分がまず  
 く、このような中  
 途半端な話にな  
 ってしまいました  
 。以上で講演を  
 終了させていた  
 だきます。



図14 「衣裳競似顔双六」明治四十四年〔1911〕



## 質疑応答

### 質問①

「部家姿錦の見物」の双六の絵を拝見し、そこに描かれている絵と文言が大変興味深かった。役者達の楽屋の姿が描かれているものと言えば稽古の様子や化粧をする様子などが一般的かと思っていた。資料の一番上・左から三つ目の絵で役者が足を組んで食事をしている図、右から二つ目・上から2つ目の役者がお茶を飲んでいる様子を描いた図、他にも役者が体を拭いたりしている図は初めて拝見したので驚いた。この様に楽屋での様子が拝見できる資料は他にもたくさん存在するのだろうか。

### 回答

多くは存在しないと思います。自分で体を拭くような行為は下っ端の役者のすること、有名な役者は弟子などがするはずです。「部家姿錦の見物」のように楽屋の何気ない風景がスケッチされている双六は珍しいのではないかと思います、ただどこまで実景を写しているかは疑う必要もあります。

### 質問②

これまで私達は歌舞伎の表の部分、つまり舞台上での役者達の演技を見て楽しむことが一般的だと思っていた。「戯場案内両面鑑」には 大工さんや看板絵師の名前まで紹介されていることを知り、江戸時代の人々は、役者だけでなく芝居の裏側も知りたいという気持ちが大変強かったのかな、と思った。その他にも江戸時代の人々の楽しみの一つとして、もじりの文化があったことが大変興味深かった。一枚摺りの中にはもじりのものは多かったのだろうか。

### 回答

江戸時代はもじり（パロディ）の文化の時代だといってもいいでしょう。オリジナリティを尊ぶ現在とは違っていました。何かをもじったという一枚摺はたくさんあります。手前みそになりますが、ご興味がありましたら『上方板歌舞伎関係一枚摺考』を読んでみてください。

### 質問③

この時代は歌舞伎以外の文楽、例えば人形浄瑠璃に関係する名鑑などは存在したのだろうか。

### 回答

太夫・三味線の一覧、あるいは素人浄瑠璃の一覧の一枚摺はよく見かけます。しか

し、実は人形遣いの資料はほんとうに少ないと思います。江戸時代、錦絵などたくさん出るのですが、人形遣いが人形を使っている図はほんとうに貴重なのです。人形を使っている双六でもあればうれしいのですが、私は見たことがありません。コレクターの山本さん宅では、私の興味のありそうなものは全て見せていただいたのですが、人形遣いのは見ませんでした。

『戯場節用集』には人形遣いの楽屋の様子が書かれています。その他、『戯場楽屋図会』という本の中には人形の分解図、人形が衣装を着けていない図が載っています。しかし資料の数としては、歌舞伎とは比較にならない程少ないと思います。

掲載図版はすべて、筆者蔵のものです。図版の補足。

図1 39. 2 糎×53. 9 糎。地名や札所は赤で囲んでいる。海・川は水色。

図2 36. 4 糎×69. 4 糎(全体)。原田屋板。地名の一部に薄い朱色。

図3 本来両面一枚摺であったものを、架蔵本は片面ずつ摺ってつないでいる。現況は35. 8 糎×88. 0 糎。掲載部は13. 0 糎×35. 0 糎。伏見・亀屋半兵衛、大阪・石川屋和助板

図4 30. 7 糎×80. 8 糎。中川(播磨屋)五兵衛・山本(塩屋)長兵衛板。

図5 掲載部分、14. 8 糎×20. 4 糎。「くるま」の部分の現状は日焼けしているが、もとは薄紅色だったと思われる。左には役者の俳名が見えている。

図6 半紙本一冊。狂画堂蘆洲画。森本(河内屋)太助・山本(塩屋)長兵衛・都賀和助・木村彌四郎(暁鐘成)刊。

図7 29. 9 糎×74. 1 糎。刊記はないが、枠外に「宝暦七マデ」とある。江戸・西村源六、京都・河南四郎右衛門、大坂・野村長兵衛板。

図8 図7の部分。下の説明の翻刻。車の部分とそれをはずしたあと。

図9 44. 6 糎×44. 7 糎。墨摺。

図11 31. 3 糎×43. 0 糎。京・本屋新七板。架蔵本は後摺か。修復のあともあり。

図12 33. 3 糎×43. 9 糎。墨摺。京・本吉板。清谷画。

図13 32. 5 糎×42. 6 糎。合羽摺。京・吉野屋勘兵衛板。玉水画。

図14 49. 8 糎×66. 8 糎。羽子板に数字がついており、回り双六。大丸印刷部著作兼印刷者・永井清治郎、発行者・大丸呉服店。銀色が豊富に使われており、豪華なもの。

(2019年12月21日、生活美学研究所本年度第3回定例研究会における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学文学部教授 管 宗 次

## 指定討論者コメント

大阪府立上方演芸資料館司書 島 田 智 子

今回の研究会は2部構成で多くの資料をご紹介いただいた。

第1部のメイン「劇場案内両面鑑」は、「萬曆両面鑑」の形式に合わせるために他の歌舞伎関係資料には見られない項目があり、そのおかげで非常に珍しい情報が得られるとのこと。パロディは元になっているものが何なのか認識されなければ成り立たない。制約あるなかでどんな内容をどう盛り込むか、工夫を凝らした作り手の遊び心やセンスを感じた。

第2部で紹介された絵双六のうち「部家姿錦の見物」と「役者家形独案内」は、役者の舞台上の姿ではなく、楽屋での様子や住まいなどが描かれている。スターの素顔（日常）を知りたいと思うファンの気持ちは今も昔も同じなのだろう。これらの絵双六をわくわくしながら眺める人々に思いを馳せた。

資料そのものについてはもちろん、作り手と受け手に対しても理解が深まり、同時代の資料に幅広く目を配ることの大切さを改めて胸に刻む機会となった。

関西大学非常勤講師 藤 岡 真 衣

江戸時代の人びとは、上演される歌舞伎の内容だけでなく、芝居の世界のあらゆる事柄に関心を持っていた。今回、荻田清先生が紹介された資料を通して、そのことがよく理解できた。役者の名前・住所・家紋などを記した「役者家形独案内」は双六の形式で、役者の私生活の情報が遊びの中に巧みに取り入れられている。また、「劇場案内両面鑑」は、日常生活の中で親しまれていた摺物「昼夜 萬曆両面鑑」の模倣（もじり）となっており、芝居附大工・看板の画工・芝居の鼯鼠連中の名前など細かな情報が盛り込まれている。当時の人びとが、趣向に富んだ摺物を手にして楽しむ



様子が目に浮かぶ。歌舞伎への関心がどのような形で表現されたのか、人びとの生活の中にどのようにして歌舞伎が文化として定着していったのかを考える貴重な機会となった。